

[原著]

## 児童の関係性攻撃と適応との関連の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科：尾花真梨子  
筑波大学人間系：濱口佳和  
立正大学心理学部：江口めぐみ

The study of association between relational aggression and adjustment in childhood

Mariko Obana, Yoshikazu Hamaguchi and Megumi Eguchi

### 問題と目的

いじめや暴力などの仲間関係における葛藤は、学校現場で依然深刻な問題である。児童生徒の問題行動等に対する調査研究協力者会議（1996）によると、いじめの様態は小・中・高校を通じて「悪口・からかい」、「仲間外れ・無視」が多く行われていることが示されている。近年では、攻撃の対象となる児童との関係性の撤回の脅しや標的児の社会的評価への誹謗などにより害をなす、関係性を志向した攻撃行動に対する研究が米国を中心になされるようにもなった（Card, Stucky, Sawalani, & Little, 2008）。このような「他児の友人関係や、仲間集団の中に含まれているという気持ちに、重大なダメージを与えることを意図した行動」という関係性に志向した攻撃形態は、「関係性攻撃（relational aggression）」と呼ばれている（Crick & Grotpeter, 1995）。関係性攻撃の具体的な行動としては、仲間外れ、無視、関係操作、噂の流布、社会的排除などのさまざまな要素が含まれる（Crick & Grotpeter, 1995; French, Jansen, & Pidada, 2002）。関係性攻撃を示す子どもの適応状態や行動的・認知的特徴も体系的に検討されており、幼児期から青年期の発達段階に共通して、関係性攻撃への従事が仲間からの拒否（peer rejection）と関連することが示唆されている（Crick, Ostrov, Burr, Cullerton-Sen, Jansen-Yeh, & Ralston, 2006; Werner & Crick, 1999,

2004）。さらに、関係性攻撃の遂行は、身体的攻撃を統制した上でもなお、内在化問題や外在化問題、孤立、境界性パーソナリティ障害傾向など多様な心理社会的不適応との関連が指摘されている（Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Ostrov, & Werner, 2006; Crick, Murray-Close, & Woods, 2005; Murray-Close, Ostrov, & Crick, 2007）。また、仲間関係に関しては、Crick & Grotpeter（1995）が、小学校3-6年生491名を対象に調査を行い、関係性攻撃とソシオメトリック地位との関連を検討している。その結果、敵味方児（仲間からの拒否も受容も高い子ども）は関係性攻撃を最も多く示し、次いで拒否児（仲間からの拒否が高い子ども）が関係性攻撃を多く示していた。すなわち、学級内の地位によっても、関係性攻撃の遂行に差異が生じるものと考えられる。

これまで述べてきた関係性攻撃に関する研究は、米国を中心に実施されており、我が国における児童を対象とした関係性攻撃の研究蓄積は未だに少ない状況である。そこで、桑原・関口・濱口（2013）は、我が国における関係性攻撃の行動特徴を網羅した測度として、「児童用多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版：MRAS-ET）」を作成した。MRAS-ETは、これまでの先行研究で作成された関係性攻撃を測定する尺度の項目、そして、いじめの手記に記載された関係性攻撃と考えられるいじめの手口を参考に考案された、教師評定版の多次元性尺

度である。関係性攻撃という概念が、未だに包括的に扱われていない状況の中で、児童の関係性攻撃を測定する尺度の開発は急務であり、その作成によって、関係性攻撃の遂行が児童の心理社会的適応に与える影響の不明瞭さの改善につながるものと考えられる。

また、関係性攻撃と適応との関連についても未だ少ないのが現状であろう。実際、児童を対象に関係性攻撃と抑うつとの関連を検討した研究では、女子においてのみ関係性攻撃と抑うつに負の関連がみられるという従来の研究成果と矛盾する結果が示されており(坂井・山崎, 2003), 研究ごとに異なる知見が提出されている。つまり、我が国の児童における関係性攻撃と適応との関連については未だ明らかになっていない点が多いことが指摘できよう。

そこで本研究では、日頃児童の行動観察を行っている教師の視点から、児童の関係性攻撃と適応との関連について検討することを目的とする。具体的には、第一に、同じ学級の中で、人気児・拒否児といったサブ・グループに分類した場合に、関係性攻撃をはじめ、社会的行動と適応とにどのような差異が生じるのかを検討する。続いて、第二に、MRAS-ETで測定される関係性攻撃の2つの側面(孤立化と追従的關係性攻撃)が、各種適応指標とどのような関連を示すのかを検討すると同時に、従来から使用されてきた次元性尺度であるCSBS-Tの關係性攻撃下位尺度との間に、関連性のパターンにどのような違いが見られるのかを明らかにする。以上を踏まえ、関係性攻撃を多次元的に捉えることの有効性を検証する。

## 方 法

**調査対象** 全国の小学校教員の中から、株式会社NTTレゾナンス、gooリサーチにモニター登録しており、自発的に参加協力をした107名に調査を依頼した。そのうち、教示の読み間違い等で標的児童の選択を誤った対象者の回答を除外した87名について分析を行った(平均年齢は43.84歳, 男性58名, 女性29名)。なお、年代は

40~50代に多く、勤務地は北海道から九州まで広域に分布している。

**調査時期** 2012年2月

**調査方法** 今年度担任した児童の中から、a. 多くの仲間たちから好かれ、その子を嫌う仲間はいない児童を1名想起させ、その児童の性別、学年、名字の最初の字を選択肢の中から選ばせた後、各種質問項目への回答を求めた。引き続き、b. aの児童と同じ学級の子どもの中から、何人もの仲間たちから嫌われていて、その子を好む仲間がほとんどいなかった児童を1名想起させ、a.と同様の手続き・内容の質問に回答を求めた。

**調査内容**

①児童用多次元性関係性攻撃尺度(教師評定・小学生版:MRAS-ET, 桑原ら, 2013): 児童の關係性攻撃を多次元的に評定する尺度であり、「孤立化(6項目)」と「追従的關係性攻撃(3項目)」の合計9項目からなる。回答は「まったく当てはまらない(1点)」~「よくあてはまる(5点)」の5件法であった。

②日本語版子どもの行動チェックリスト教師用(CBCL-TRF)(Achenbach, 1991): 標的児童の過去2ヶ月の状態について、「あてはまらない(0点)」~「たいへん/よくあてはまる(2点)」の3件法で回答を求めた。「抑うつ・不安尺度」は、全18項目の中から、特に抑うつ症状を示唆する7項目を抜粋して使用した。また、「非行的行動尺度」は全9項目を使用した。

③CSBS-T: Crick(1996)の日本語版(Kawabata, Crick, & Hamaguchi, 2010)の15項目を使用し、「向社会的行動(6項目)」、「顕在性攻撃(4項目)」、「關係性攻撃(5項目)」の3因子からなる。評定は、「全然そうではない(1点)」~「いつもそう(5点)」の5件法であった。

## 結 果

### (1) 人気児と拒否児間の差異

人気児と拒否児にどのような差異が見られるのかを検討するために、すべての変数に関して、全サンプルにおいて対応のある $t$ 検定を

行った (Table 1)。その結果、向社会的行動では0.1%水準で有意差が見られ、人気児の方が拒否児よりも有意に得点が高かった。それ以外の変数については、拒否児が人気児よりも有意に得点が高いことが明らかになった。

#### (2) 性別を考慮した人気児・拒否児の比較

性別を加味した上で、人気児・拒否児間にごのような差異が見られるのかを検討するため

に、(1)と同様の手続きによって対応のある  $t$  検定を行った。その結果、男子ペア・女子ペアともに、向社会的行動では人気児の方が拒否児よりも有意に得点が高くなり、それ以外の変数においては、(1)と同様、すべて拒否児の方が人気児よりも有意に得点が高いという結果であった (Table 2・3)。また、人気児女子と拒否児男子間の差異を検討したところ、向社会的

Table 1 人気児と拒否児間の差異の検討

	人気児		拒否児		$t$
	N	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	
孤立化	87	9.43 (4.94)	87	17.41 (7.29)	-8.35***
追従の関係性攻撃	87	5.16 (2.70)	87	9.39 (4.02)	-8.47***
MRAS-ET 合計	87	14.59 (7.44)	87	26.80 (10.86)	-8.64***
抑うつ・不安	87	8.17 (1.98)	87	10.54 (3.27)	-6.93***
非行的行動	87	10.09 (2.25)	87	13.17 (3.59)	-7.49***
向社会的行動	87	17.41 (5.84)	87	10.86 (4.75)	8.05***
顕在性攻撃	87	4.83 (2.10)	87	7.94 (4.56)	-6.37***
関係性攻撃	87	6.22 (2.76)	87	10.02 (5.15)	-6.72***

\*\*\*:  $p < .001$

Table 2 男子ペアにおける人気児と拒否児間の差異の検討

	人気児		拒否児		$t$
	N	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	
孤立化	18	10.56 (5.23)	18	17.28 (8.20)	-2.66*
追従の関係性攻撃	18	5.61 (2.66)	18	9.17 (4.50)	-3.07**
MRAS-ET 合計	18	16.17 (7.69)	18	26.44 (12.38)	-2.86*
抑うつ・不安	18	7.89 (4.50)	18	10.44 (3.71)	-3.10**
非行的行動	18	10.17 (2.87)	18	13.22 (4.53)	-2.53*
向社会的行動	18	16.06 (5.30)	18	11.28 (4.40)	2.92***
顕在性攻撃	18	5.22 (3.00)	18	6.44 (3.54)	-1.52n.s.
関係性攻撃	18	7.00 (4.14)	18	10.22 (5.23)	-2.56*

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

Table 3 女子ペアにおける人気児と拒否児間の差異の検討

	人気児		拒否児		$t$
	N	平均値 (SD)	N	平均値 (SD)	
孤立化	27	10.00 (6.44)	27	15.19 (6.49)	-3.48**
追従の関係性攻撃	27	5.33 (3.41)	27	8.41 (4.15)	-3.63**
MRAS-ET 合計	27	15.33 (9.71)	27	23.59 (9.89)	-3.70**
抑うつ・不安	27	8.63 (2.90)	27	11.11 (3.64)	-3.74**
非行的行動	27	10.52 (2.97)	27	12.70 (2.89)	-3.87**
向社会的行動	27	17.37 (5.71)	27	10.33 (5.29)	4.53***
顕在性攻撃	27	5.11 (2.22)	27	8.30 (4.57)	-3.76**
関係性攻撃	27	6.33 (2.70)	27	8.30 (4.43)	-2.51*

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

行動では人気児女子の方が拒否児男子よりも得点が有意に高く、それ以外はすべての変数で拒否児男子よりも人気児女子の方が得点が高いことが示された。さらに、人気児男子と拒否児女子においても向社会的行動で拒否児女子よりも人気児男子の方が得点が高く、それ以外のすべての変数で人気児男子よりも拒否児女子の方が有意に得点が高かった。

(3) 関係性攻撃と適応との関連

まず、人気児・拒否児別に、MRAS-ETの2種類の関係性攻撃、向社会的行動、顕在性攻撃を説明変数、抑うつ・不安ならびに非行的行動を基準変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 4)。その結果、 $R^2$ は拒否児の抑うつ・不安では.07と低いがすべてで有意となり、人気児並びに拒否児の抑うつ・不安傾向と非行的行動は、MRAS-ETの関係性攻撃とCSBS-Tの向社会的行動及び顕在性攻撃によって有意に説明されることが明らかになった。特に人気児、拒否児とも非行的行動では $R^2$

は.50, .55と高い値を示した。さらに、人気児では、追従的關係性攻撃が抑うつ・不安と、孤立化が非行的行動と正の関連を示し、拒否児では追従的關係性攻撃が非行的行動と正の関連を示すに留まった。一方、顕在性攻撃は人気児においては抑うつ・不安並びに非行的行動と正の有意な関連を、また拒否児においては、非行的行動と正の関連を示した。拒否児において向社会的行動が抑うつ・不安と正の有意な関連を示した。

次に、同様の手続きにより、従来から使用されているCSBS-Tの3下位尺度を説明変数、抑うつ・不安ならびに非行的行動を基準変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 5)。ここでは、人気児・拒否児いずれにおいても、抑うつ・不安と非行的行動の両者で $R^2$ は有意となったが、 $\beta$ の値はMRAS-ETを関係性攻撃指標に用いた時よりも、幅が大きく.11~.68であった。CSBS-Tの関係性攻撃は、人気児と拒否児の非行的行動と高い正の有意な

Table 4 関係性攻撃と適応との関連に関する重回帰分析結果

	人気児				拒否児			
	抑うつ・不安		非行的行動		抑うつ・不安		非行的行動	
	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$
MRAS-ET 孤立化	.15	.45***	.42***	.60***	.18*	.21*	.20	.58***
MRAS-ET 追従的關係性攻撃	.32***	.44***	.16	.56***	.17	.20*	.45***	.59***
CSBS-T 向社会的行動	-.05	-.26**	.04	-.27**	.27*	.27**	.12	.25*
CSBS-T 顕在性攻撃	.38***	.48***	.48***	.63***	.14	.19*	.41***	.56***
$R$	.56***		.74***		.27*		.70***	
$R^2$	$F(2,84) = 19.52$		$F(2,84) = 51.64$		$F(1,85) = 6.65$		$F(2,84) = 41.19$	
	.32		.55		.07		.50	

+ :  $p < .10$ , \* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .001$

Table 5 CSBS-Tと適応との関連に関する重回帰分析結果

	人気児				拒否児			
	抑うつ・不安		非行的行動		抑うつ・不安		非行的行動	
	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$	$\beta$	$r$
CSBS-T 関係性攻撃	.16	.46***	.68***	.60***	.33**	.33**	.60***	.60***
CSBS-T 向社会的行動	.03	-.26**	-.13	-.27**	.19*	.19**	.08	.25*
CSBS-T 顕在性攻撃	.48***	.48***	.10	.63***	.02	.27*	.34**	.56***
$R$	.48***		.68***		.33***		.60***	
$R^2$	$F(1,85) = 25.20$		$F(1,85) = 71.58$		$F(1,85) = 10.43$		$F(1,85) = 48.15$	
	.23		.46		.11		.36	

+ :  $p < .10$ , \* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .001$

関連を示した。また、顕在性攻撃は、人気児における抑うつ・不安と拒否児の非行的行動で有意な正の関連を示すことが明らかになった。

## 考 察

本研究では、児童の関係性攻撃と適応との関連について、教師評定を用いた検討を行った。

### (1) 人気児と拒否児間の差異

人気児と拒否児といったサブ・グループに分類した場合に、適応との関連にどのような差異が見られるのかを検討した結果、向社会的行動では人気児の方が、それ以外の変数においては拒否児の方が有意に得点が高いことが示された。関係性攻撃について言えば、Crick & Grotpeter (1995) でも拒否児は敵味方児の次に関係性攻撃を多く行うことが明らかになっており、人気児との差異を検討した本研究の結果は、先行研究を一部支持したものと考えられる。従来、人気児・拒否児の抽出は、学級ごとにソシオメトリック・テストを行って仲間指名あるいは仲間評定に基づいて算出される指標から行うものである (Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982)。一方、本研究では単に評定者である担任教師に対して、「多くの仲間たちから好かれ、その子を嫌う仲間はほとんどいない」あるいは「何人もの仲間たちから嫌われていて、その子を好む仲間がほとんどいない」というように、人気児と拒否児のそれぞれの操作的定義を示し、それに最もよく該当する子どもを1名ずつ指名してもらうという方法がとられている。このように、人気児・拒否児の抽出方法が大きく異なるにもかかわらず、先行研究と同様の結果が得られたことは、顕在性と関係性の2種類の攻撃行動ならびに向社会的行動の仲間内での受容・拒否との関連の一般化可能性の高さを示していると言えるかもしれない。

### (2) 性別を考慮した人気児・拒否児の比較

性別要因を加えて、人気児・拒否児間に社会的行動や適応との関連にどのような差異が見られるのかを検討したところ、すべての組み合わせにおいて向社会的行動では拒否児よりも人気

児、それ以外の変数では人気児よりも拒否児の方が有意に得点が高いことが示された。従来から、関係性攻撃は女子に顕著な攻撃形態であることが認知されてきた (Crick, Bigbee, & Howes, 1996) が、本研究で示されたように、性別要因以上に学級内の地位によって社会的行動や適応との関連を左右する可能性があることは興味深い。

### (3) 関係性攻撃と適応との関連

人気児・拒否児別に2種類の関係性攻撃、向社会的行動、顕在性攻撃と抑うつ・不安ならびに非行的行動との関連について検討した結果、人気児では追従的關係性攻撃および顕在性攻撃が非行的行動と、いずれも正の関連があることが示唆された。この結果は、人気児の中でも攻撃的な言動を呈する児童はより不適応であることを示している。既にみたように、人気児の攻撃行動の平均値は低い。その低い攻撃行動の範囲内でも適応指標と関連が見られるのは、注目すべきことである。ところで、人気児において、追従的關係性攻撃が抑うつ・不安に対して正の関連を示す一方で、孤立化が非行的行動と正の関連を示したことは何を意味するのであろうか。追従的關係性攻撃は、仲間が行う関係性攻撃に同調して行うもので、自らが主体になって行うものではない。強い攻撃動機をもって行うわけではないだけに、仲間と同調して関係性攻撃を行ったものの、相手からの報復とそれに伴って生じる人気児としての地位の低下が気になり、その結果不安や抑うつ傾向が高まる可能性が考えられる。一方、孤立化の高さは、無視・関係操作・排除といった代表的な関係性攻撃を自ら積極的に行う傾向の強さを表す。人気児の地位を持っていて孤立化を行う傾向の強い者は、関係性攻撃を自らが率いる集団を自分に都合よくコントロールするための手段として用いている可能性がある。そうであれば、こうしたリーダーシップが通用する仲間集団には攻撃行動許容的な雰囲気があり、こうした仲間集団の雰囲気がリーダーである人気児の反社会的傾向をさらに強化し、非行的傾向を強めることが考えられる。しかし、以上に示したのは本研究

における解釈にすぎないため、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

また、拒否児においては、追従的關係性攻撃と顕在性攻撃が非行的行動と関連することが示された。顕在性攻撃と非行的行動との正の関連は既に多くの研究で実証されている (Coie & Dodge, 1998)。拒否児はおしなべて顕在性攻撃の平均値が高いが、その中でもこの関連が有意になるのは、顕在性攻撃と非行的行動の結びつきの強さを示す結果といえよう。一方追従的關係性攻撃は、先にも説明したように仲間への同調として行われる噂の流布や陰口である。攻撃行動を特徴とした拒否児であるため、普通の仲間関係からは既に排除されており、仲間がいるとすれば、それは自分と同様に一般の仲間からは拒否されている子どもたちである可能性が高い。そうした仲間が誰かについて陰口を言ったり噂を広めたりする時、それに同調することでこのグループの中での地位を獲得し、結果として反社会性を強めていくことになるのではないだろうか。

なお、拒否児において、向社会的行動が抑うつ・不安と関連することも示された。すなわち、他児を遊びに誘ったり、助けたりする傾向が強いにもかかわらず、集団内の地位が低いことが影響してそれを受け入れてもらえないために抑うつ・不安が高まる可能性があり、かかわりを求めれば求めるほど、内在化問題を導きやすくなるといえよう。

以上のように、人気児と拒否児の異なる学級内地位において、社会的行動と適応指標との関連パターンは異なることが示されたとともに、孤立化と追従的の2種類の關係性攻撃は機能的に異なる可能性が示唆された。また、従来から用いられてきた CSBS-T との比較においては、適応指標に対する説明率自体は CSBS-T の3下位尺度のセットより、MRAS-ET と CSBS-T の向社会的行動ならびに顕在性攻撃のセットによる方が高いことが明らかになった。しかし、CSBS-T によって測定された關係性攻撃の方が非行的行動との  $\beta$  がより大きな値を示しており、CSBS-T の關係性攻撃尺度の有用性もまた

同時に示される結果となった。しかし、關係性攻撃にはさまざまな要素が含まれており、多角的に捉えることによってさらに詳細に適応との関連を検討する場合には、MRAS-ET の方が有用であると言えよう。今後はこの尺度を用いて児童の關係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討を進めることが望まれる。

### 今後の課題

最後に、本研究における限界と今後の課題を2点述べる。1点目は調査対象についてである。本研究では小学校教員を対象に調査を行った。一般的な質問紙調査では、攻撃性のような社会的に望ましくない特徴については、自己評定よりも他者評定の方が精度が高くなることが知られている。しかし、關係性攻撃の個人的で、相対的に隠れた (covert) 性質により、その測定が容易ではないこと (e.g., Archer & Coyne, 2005)、現在の学校現場において他者評定を用いることに倫理上の問題が伴うことも問題視されている。そのため、Crick, Werner, Casas, O'Brien, Nelson, Grotper, & Markon (1999) が指摘するように、他者評定が困難な状況下では自己評定の有用性を述べていく必要がある。このことから、今後は、児童に対して調査を実施したり、あるいは自己評定と他者評定を併用するなどの工夫が必要であると考えられる。2点目として、サンプル数の少なさを指摘することができる。本研究では、調査手続きの都合上、比較的小さなサンプルサイズでの実施に留まった。そのため、本研究で得られた知見が一般化可能なものかを検討するために、今後はよりたくさんの方のデータを収集した上での検討が望まれる。

### 引用文献

- Achenbach, T.M. (1991). Integrative guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles. Dept. of Psychiatry.
- Archer, J., & Coyne, S.M. (2005). An integrated

- review of indirect, relational, and social aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 212-230.
- Card, N.A., Stucky, B.D., Sawalani, G.M., & Little, T.D. (2008). Direct and indirect aggression during childhood and adolescence: A meta-analytic review of gender differences, intercorrelations, and relations to maladjustment. *Child Development*, 79, 1185-1229.
- Coie, J.D. & Dodge, K.A. (1998). The development of aggression and antisocial behavior. In W.V. Damon (series Ed.) & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of Child Psychology, Vol. 3: Social, emotional, and personality development* (5<sup>th</sup> ed., pp.779-861). New York: Wiley.
- Coie, J.D., Dodge, K.A., & Coppotelli, H. (1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- Crick, N.R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N.R., Bigbee, M.A., & Howes, C. (1996). Gender differences in children's normative beliefs about aggression: How do I hurt thee? Let me count the way. *Child Development*, 67, 1003-1014.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Crick, N.R., Murray-Close, D., & Woods, K. (2005) Borderline personality features in childhood: A short-term longitudinal study. *Development and Psychopathology*, 17, 1051-1070.
- Crick, N.R., Ostrov, J.M., Burr, J.E., Cullerton-Sen, C., French, D.C., Jansen, E.A., & Pidada, S (2002). United States and Indonesian children's and adolescents' reports of relational aggression by disliked peers. *Child Development*, 73, 1143-1150.
- Crick, N.R., Ostrov, J.M., & Werner, N.E. (2006) A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 127-138.
- Crick, N.R., Werner, N.E., Casas, J.F., O'Brien, K.M., Nelson, D.A., Grotpeter, J.K., & Markon, K. (1999). Childhood aggression and gender: A new look at an old problem. *Nebraska Symposium on Motivation*, 45, 75-141.
- Jansen-Yeh, E., & Ralston, P. (2006). A longitudinal study of relational and physical aggression in preschool. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 27, 24-268.
- 児童生徒の問題行動等に対する調査研究協力者会議（編）（1996）. 児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果 文部省初等中等教育局.
- Kawabata, Y., Crick, N.R., & Hamaguchi, Y. (2010). Forms of aggression, social-psychological adjustment, and peer victimization in a Japanese sample: The moderating role of positive and negative friendship quality. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 38, 471-484.
- Murray-Close, D., Ostrov, J.M., & Crick, N.R. (2007). A short-term longitudinal study of growth of relational aggression during middle childhood: Associations with gender, friendship intimacy, and internalizing problems. *Development and Psychopathology*, 19, 187-203.
- 坂井明子・山崎勝之（2003）. 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 298-309.
- 桑原千明・関口雄一・濱口佳和（2013）. 児童用多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・小学生版）の作成 筑波大学発達臨床心理学研究, 24, 27-34.
- Werner, N.E., & Crick, N.R. (1999). Relational aggression and social-psychological adjustment in a college sample. *Journal of Abnormal*

*Psychology*, 108, 615-623.

Werner, N.E., & Crick, N.R. (2004). Maladaptive peer relationships and the development of relational and physical aggression during middle childhood. *Social Development*, 13, 495-514.

## 付 記

本研究は、平成23年度科学研究費補助金基盤研究 (B)「関係性攻撃と心理社会的適応との関連についての生涯発達心理学的研究 (課題番号: 22330187, 研究代表者: 濱口佳和)」の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は、日本教育心理学会第54回総会 (琉球大学) にて発表された。